



キャンパス／東京都港区 学生数／787人  
建学の精神／時代に適応する実学の教授研究により、職業に必要な能力を育成するとともに、知性と品性を涵養し、女性の人格形成と自立を目指す  
学科／服飾芸術、食物栄養、国際コミュニケーション

CASE STUDY

# 短大だからこそその価値を追求し 挑戦する学生、挑戦する大学へ

## 戸板女子短期大学

積極的な教育改革と広報によって、定員割れからのV字回復を成し遂げた戸板女子短期大学。その原動力である「挑戦」をキーワードにした質向上への取り組みを聞く。



学長 白川 はるひ

しらかわはるひ ●高校の教員として20年教壇に立った後、10代へのキャリア教育の必要性を感じ、2010年戸板女子短期大学へ入職。総合教養センター長、国際コミュニケーション学科教授を歴任し、2022年より現職。

### 常に挑戦、何度も挑戦 圧倒的な質と量のPBL

「高校時代の恩師や友人に『変わったね、輝いているね』と言われた」。毎年聞こえてくる学生の声です。100人もの企業の人事担当者に学生が学修成果をプレゼンしアドバイスをもらう就活イベント「TOITAフォーラム」では、何人も学生がその場でスカウトされます。就職後、現場から数年で本部に抜てきされる卒業生も少なくありません。

このような「出口の質」を支えるのが、本学が縦横無尽に展開する「挑戦マインド」を育てる教育です。その代表例が、学生がリアルビジネスに挑む「TOITAプロジェクト演習」\*1。プロセスエコノミーを一から体験するアパレルブランド起業、「変なホテル」へのビジネス提案、離島の活性化

## 教育機関として成長する大学への取り組み

	Before	課題	After
質施策	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶測定を前提としないDP</li> <li>▶各種学生アンケート、外部アセスメント等でわかった課題を基に年度単位で改善</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶DPの達成度が測定しにくい</li> <li>▶質保証のしくみの中に正式な学生参画のしくみが位置付けられていなかった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶達成度の測定・可視化が可能な外部アセスメントを活用したDPへの変更、アセスメントポリシーの策定</li> <li>▶各学科の重点DPと卒業時アセスメント結果の照合を図る。授業評価アンケートでもDPの達成度を聞き、授業目標と回答結果のギャップがあれば授業改善へ</li> <li>▶FD・SDを統合し、「全学FDSD委員会」に再編、幹部教職員が共に学生の成長をテーマに意見交換する機会をつくる</li> <li>▶「学生FD委員会」を発足させ、正式な形で質保証のしくみに学生に参加してもらう</li> </ul>
教育改革・改善	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶産学連携PBLによる「社会で通用する実践力」を育成するカリキュラムや「チームといたん」等の課外活動</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶学生の気質の変化による、学ぶ力の低下</li> <li>▶社会や企業ニーズの変化への対応</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶学生や卒業生アンケート、高校生の変化や就職の観点、他学科の視点なども入れながらカリキュラムを見直し、産学連携PBLを深化・増設した、より実践的な科目構成に</li> <li>▶研究授業や授業検討会を実施し、授業力の向上を図る</li> </ul>
成果例	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶各種PBLやPJ活動によって成長した学生主体の広報活動で学生募集がV字回復</li> <li>▶社会人基礎力の向上と、就職実績の向上、多様化</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶多様なキャリアの創出</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶国内就職以外の進路として海外をめざす学生の増加(留学、編入学、就職)</li> </ul>

注目

### 学生に多様な挑戦の機会をもたらす 「TOITAプロジェクト演習」の学修成果

今では、30ものPJに拡大した「TOITAプロジェクト演習」。商品開発、イベント企画、海外インターンシップや起業など、多様なPBLが設けられている。Z世代の感覚をビジネスに生かしたい企業からのオファーが相次ぎ、連携先には事欠かない。学生がウエディングカンパニーを起業する例も出てきた。14年前、コンビニ業界から転職し、このPJを始めた金井裕太学長補佐は、『「学生が社会に出て即戦力として活躍できる力を育むために必要な教育」として始めた。本気でリアルビジネスに取り組み、失敗や成功を繰り返す経験により、自分の長所・短所やキャリアへの気づきを得る』と語る。

プロジェクトを通じた成長は、数字にも表れている。外部アセスメントの結果を分析すると、『自己肯定感』と『行動持続力』は、多くの活動に共通して伸びが見られたが、海外プログラムに参加した学生は入学前後で『対人関係能力』が、チームといたんに参加した学生は『自己の強みの理解』が特に伸びているなど、参加した活動によって特徴が出ている。「この結果は教員にも共有し、担当授業を振り返って、改善に生かしている」(白川学長)。

### 「TOITAプロジェクト演習」の例

#### スイーツメニュー開発<かっぱ寿司>



廃棄バナナの使用が条件。正式に商品化され、2週間で数万食を販売。

#### アパレルブランド起業プロジェクト<once elf(株)>



ヘルソナ分析から商品企画、海外での仕入れまで、学生の手で成し遂げた。

など、30種類ものPBLを用意しています。この他にも、常時、学内業務や企業連携企画への参加の機会があり、これらの活動は基本的に定員のある選抜制をとっています。つまり、参加するためにはまず「挑戦」が必要なのです。例えば、入学者数のV字回復に貢献した学生広報スタッフ\*4、チームといたん」は、「これに参加したいから入学した」学生が多く、毎年、選抜に落ちる者が多数いるほどです。しかし、その後もさまざまな企画募集が続くため、何度でも挑戦できます。また、PBLの中で企業にプレゼンすることにより、社会人とのコミュニケーションの経験を積める場、いわば「社会と接する場数」が多いのも特徴です。本学の学生の多くは、決して活動的な高校時代を送っていたわけではありません。そうした学生が入学後、就活まで1年という短大ならではの区切りの中で、多種多様な企画に挑み企業にプレゼンし続け2年間を走り切る。この「プロセス」こそ、就職先での高評価や高校生を引きつける彼女たちの成長と自信の源となっています。インターブランド調査によると、成績によらず多くの学生が挙げた本学のイメージを表す言葉は「挑戦」でした。

### 就職協働に学生も加わり DPの達成度向上へ

教育の質向上に向けて、教職員も挑戦の連続です。2024年には、DPを達成度の測定が可能な外部アセスメントベースのものに変更し、カリキュラムも社会や企業のニーズ、学生の変化に合わせて見直しています。看板のPBLも、学生が企業の課題探しから取り組み演習など、より実践的なものに深化、増設していきます。

課題もあります。学生の学ぶ力の低下を実感しているため、授業アンケートでDPの達成度を質問し、回答結果から授業方法を見直すほか、研究授業など、初等中等教育の授業改善ノウハウも導入しました。しかし、教育力は教員だけで高められるものではありません。就職協働で今後の教育を検討するために、FDとSDを統合した全学FDSD委員会を設置しました。本年度からは、学生FD委員会も発足し、学生が学びづくりにも挑戦します。多様なキャリアが求められる今、就職以外の道を模索し、本年度、韓国の名門女子大への編入学制度も始めました。「2年間」というデメリットをメリットに変える挑戦を続けていきます。

\*1 商品を生み出すまでのプロセスを発信し、収益につなげる手法 \*2 H.I.S.ホテルホールディングス運営のロボットが業務を行うホテル \*3 課題解決型演習 \*4 学生がオープンキャンパスの企画・運営、学校紹介、体験授業の企画等を担う同短大のブランディングの柱 (Between No.303「志願者減時代の学生募集」P.30参照)